

## 編集室から

とうとう師走になってしまいました。毎年、この時期になると、改めて時の流れの速さを感じ知らされるのですが、中でも今年の時間は特に早かったように思います。

それは県外出張が多く、事務所には月の半分も居るか居ないかの日々だったからではないかと思います。出張から帰って、荷物をほどこき、すぐにまた次の出張の準備を整える…。その間にも、他の仕事に向き合い、会社の雑務をこなし、自分の心身のメンテナンスをする。これを繰り返した一年だったような気がします。

それでも、大病するわけでもなく乗り越えられたのは、多くの現場でご縁に恵まれ、素晴らしいチームワークと環境の中で、携わらせて頂いたからに他なりません。これまでの人生の中で、おそらく最高な人々との巡り合わせの中でお仕事をさせていただけることは、何よりも幸せなことですし、光栄なことです。

思えば、これまでもこうやって来られたのは、数々の貴重なご縁を頂いた賜です。我が国の言葉で感謝を表す表現に「ありがとうございます」がありますが、まさに「有ることが難しい」奇跡的なことを「ご縁」と表現されているのかも知れません。

ご縁に恵まれることと、そうでないことの差は天地ほどもあると思いますが、それが何故訪れるのか、どうやって巡り合わせてもらえるのか、還暦を越えて生きてきても未だ皆目わかりません。ほんとうに不思議なことであり、そのため自ずから感謝の念が湧いて参ります。

ご縁に恵まれていると申し上げると、世知辛い現代では、積極性がないように捉えられるかも知れませんが、振り返ってみると己が果たしたことなどほんの僅かなものに過ぎず、つくづくご縁に生かされているとしか思えません。

生かされている限り、走り続けます。(は)



のと  
だらぼち

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川畠さんが「能登だらぼち」を引き受けて改装開店されました。

上京された際、ご利用になってみてください。

のと だらぼち  
03-5537-3078  
17:00~23:00 日曜祝休

中央区銀座8-4-27  
プラーザ銀座ビル地下1階  
(銀座外堀通りasics前)

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2022/12  
(株)アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167  
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217  
Fax 076-233-7375  
Email [usric@neting.or.jp](mailto:usric@neting.or.jp)



2022/12  
(株)アスリック  
<http://www.neting.or.jp/usric>

## 師 走



東京都愛宕神社にて  
by hama

## 寄稿『新型コロナ第八波の被害者』

サンポート高松クリニック 井垣 俊郎

日々公表される新規感染者数が、再び増加しています（グラフ1）。しかし、みんな薄々気がついているのではありませんか。実際の感染者数は、これより遥かに多いはずだと。きちんと検査を受けようという意識の薄まりは、もう如何ともし難いようです。そしてサッカー杯の熱狂を見ていると、コロナはもう過去の事だと思いたくなるのも仕方ありません。ですがせめて高齢者施設で今なにが起きているかは、知っておいてください。



◎ 枯れ野に火を放つように、高齢者施設では感染が拡大しています。ひとたび感染が始まると、その施設内での拡散を止めることは極めて困難です。常に人手不足の状態なので、一人の職員で常に複数の入所者と対応せざるをえません。接触も密です。入所者の自主的な感染防護には限界があるし、かといって施設して隔離をすれば虐待と取られかねません。マンパワーの不足に加えて職員の高齢化も進み、疲労が蓄積しています。このまま拡大が続けば、運営を維持できなくなる施設が続出すると思われます。その時、高齢者はどこへ行けばよいのでしょうか。

◎ オミクロン株になって、肺炎は激減しています。ですから、重症者として入院するケースは減っています。逆に、重症例でなければ、医療機関は引き受

けてくれません。施設に嘱託医がいても、施設内でできる医療行為は限られています。発熱などの感染症状から体力が徐々に低下し、持病が悪化していくのを手をこまねいて見ているしかありません。早急的確な治療を行えば、これまでなら持ち直すことも出来たのですが・・・感染ルートは、もはや調べようがありません。家族の面会はまだ制限されていますから、おそらく職員からなのでしょう。しかし、職員を責めることはできません。一般的な人たちより遥かに注意して自粛した生活を送っていても、無症状の感染者と接点をもつことなく日常生活をおくることはもはや不可能です。

◎ 飲食と旅行は、政府の後押しを受けて急速に復旧しています。小児科の医師が嘆いていました。修学旅行が恐ろしいと。子供たちの気持ちを考えると辛いです。子供たちを見れば密接・密集・密閉の集団が日本中でシャッフルされるようなものです。グラフ2を見てください。小児のワクチン接種率は、依然として低いまです。もちろん、小児へのワクチン接種がどれほど有効かは未知数です。でも子供から大人へ、大人から高齢者へ、感染は拡大するべくして拡大しているのも事実です。感染力は強いけれど病原性は弱い第8波において、被害を一手に引き受けるのは高齢者です。



【プロフィール】  
（いがき としお）金沢大学北潟寮で、濱さんの二年後輩でした。濱さんは、とつても怖かった…。卒業後は金沢を離れ、現在は温暖な讃岐高松で又クヌクしています。

## 濱の起業塾 四十四『商品開発③』

道の駅・生活関連サービスなどの社会事業を開発しようとする際、民間の経済活動では当たり前となっているマーケティング、特に核となる顧客層を特定するターゲティングの概念が阻害される傾向にある。せっかく、調査分析を行ってメインターゲットを設定しても、それはそれとして事業が進むにつれ、なし崩され、いつの間にかターゲット不在のプロジェクトと化していく例も、少なくはない。

社会起業の領域で、ターゲティングを阻害する壁は、何故存在するのか。それは、我が国に根強い公共事業という概念に起因すると考えている。新しい地域社会を創造するに際しては、この「公共」という概念を一度、吟味する必要があるのではないだろうか。

公益事業は、不特定多数、つまり「みんなのため」の事業である。

公益事業は、特定多数、つまり「私たちのため」の事業だ。生活する上で、具体的な問題・課題に直面している人に、それに応える新しいサービス・商品を提供しようとするならば、その「お困りごと」

を具体的に掘り起こさねば、事業を興すことはできない。必然的に、対象は絞り込まれ、具体化していく。一方で、そのお困り事が、今の時代の流れの中で、潜在的であっても根強いものであるならば、対象は、量的に少なくないはずであると、考えられないだろう。か。

欧米の民主主義国家では、公益と公益の切り分けはシンプルかつ、明快になっているようだ。ところが我が国は、世界的に見ても草の根ベースで公益性が高く意識され、大切にされてきた。災害が多く、耕作に適した土地に乏しい、この国にあっては「助け合い」の意識がなくては、平穏な暮らしは実現できなかったからではないか、と思う。

が、明治以降、弛まぬ西欧化の流れで、特に高度成長期とバブル期を中心に、着実に公益思考が失われ、私益と公益あるいは、公益が激突する場面が急増している。

地域を再生するための、新しい商品やサービスを開発する際、さらにはそれらを包含する社会事業をデザインするにあたって、これらの歴史的な潮流を捉えているかどうか、重要な視点であると考えている。



朝日新聞（11月20日と27日）版に、上記特集記事が掲載されていた。国の調査によると、中2男子のスポーツが「嫌い」「やや嫌い」の割合は、2008年度の11.6%から2021年度が12.7%に、中2女子も2008年度の20.7%から24.7%にともに上昇している。2回に渡るこの記事は、第1回「体験から」、第2回「先生たちは」である。それぞれの主旨を紹介すると、体験からは『体育が苦手な子どもは、今も昔も一定数います。体育嫌いの声を聞いていくと、指導のありかたや児童・生徒の序列化、ジェンダーバイアス（例 女子が男子から体操着姿をからかわれたこと）といった根深い問題が見えてきました』、もう一つの「先生たちは」、『体育は、何を学ぶ教科なのでしょうか。スポーツを体験したり、運動を続ける入り口になったりするだけではなく、一人ひとりの心と体の成長や数十年先の社会と暮らし方にまで広げられるかもしれません。体育嫌いの声に気づいた人たちは、試行錯誤を始めています』である。

これらの記事に関心を持って読んだ。筆者も主に高校を卒業するまで体育嫌いであった。持久走、器械体操（鉄棒やとび箱）・マット運動、球技（主にソフトボール、バレーボール、バスケットボール）、水泳、スキーなどすべて苦手であった（スポーツ観戦は好きであるが）。そのなかでも一番苦手なのが器械体操・マット運動であり、なぜか水曜日の4時限が体育の時間が多く、毎週月曜日くらいから憂鬱になり、水曜日が終わるとほっとしたものだった。他教科はおおよそ教科書に沿って進むため今日やることの把握ができるが、高校時代の体育は、特に球技などは生徒の声で決まっているように見えた。新聞に書かれていることとはやや異なるのだが、筆者が一番体育を嫌な理由は、うまくできない自分への劣等感、他人の眼を気にすることだったように思う。しかし、運動が不得意だからといって、表向きにはクラスメートたちに嘲笑されるとか、何かを言われたことはなく他者との関係はなかったと記憶している。むしろ、「上村くん」頑張っ！と同級生女子からも応援されたこともあった。

記事の読者からの声には、体育の得意な子からチーム競技で「あなたのせいで負けた」と言われたことを40年経過していても覚えていたりとか、教員の中には勝利至上主義のような高圧的な人もいたので、そのような教員と接すると子ども時代に嫌な思いをしたことがよみがえるという（50代女性）。体育は他教科に比べて、「とりあえずやってみる」だけで進むことが多いと感じた。いきなり試合をすることがあった（40代女性）。確かに教員の年齢的なこともあるが、実技で模範としてやってみせるのは運動が得意な子だった記憶がある。

そのなかで、いまの体育の授業が変わってきているという。体育の学習指導要領が小学校は2020年度から、中学校は2021年度から実技が苦手な子どもも高評価できる仕組に。体育で実技以外にも比重を置くために「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間力等」が明示された（帝京大、高田教授）。また、東京都の教員の側では2年前に「体育嫌い研究会」を始め、体育が嫌いだった人に思いをじっくり聴く会もできて、スポーツを崩して楽しむ「ゆるスポーツ」、新しいスポーツをつくって楽しむ「未来の運動会」など、新しい体育のあり方も模索されているという。体育の時間が実技の不得意な子どもにも、光をあてた時間にしてもらいたいものである。

日本企業の99%が中小企業であることは皆さんご存知だと思います。その日本の屋台骨を支えてきた中小企業が大きな問題を抱えています。それが『事業承継問題』です。中小企業白書2021年度版によると、高齢化した経営者の引退が進んでいるものの、後継者が不在と回答する企業が約4割存在しており、廃業という選択肢をつきつけられている状況にあります。また廃業した企業のうち6割が黒字というデータもあります。

かく言う僕も東京と能登で中小企業を経営する身であり、また今現在、高齢の父からの事業承継を進めている状況にあります。今回は自分自身が経験したなかで、ここが重要ポイントかなと感じていることをお話ししたいと思います。

## 1.事業承継のパターン

(1)親族内承継 ※特に小規模・同族企業においてよく見られる形態

特徴としては、

- 計画的な経営承継と相続による財産、株式移転が可能だが、中小企業と言っても企業価値の評価によって株価算定されるので、内部留保が大きい企業ではとんでもない額の贈与税がかかるケースがあります。
- 親子であるケースにおいては、相互の意思が複雑に働いてしまうケースもある。自分自身の色を出したがる。前任者のやり方の否定から入ってしまう。やりすぎは禁物。

承継のポイント

- 承継する人間がまずは下積みをする。現場知らずして経営なんてできませんという話。
- 株主構成に気を付けること。承継者は確実に過半数以上を贈与もしくは相続できる体制にしておくこと
- 社内に承継チームをつくること。承継者1人ではやらず、新たな幹部となる人材と経営改善計画を作成していくこと。
- 現経営者の退任後のポジションや処遇について本人および周囲と事前合意しておくこと。承継者とのダブルボスにならないようにする。

(2)従業員承継 ※わりと大きな中小企業でのケースが多いようです。

特徴としては、

- 現場経験や取引先との信頼関係もあるため承継しやすいが、同族企業だと、単に執行権を従業員に与えるだけであり、単なる傀儡政権になることも。
- 株式や資産の移転において、大きな問題というか、創業者側にとって大きな抵抗が生じやすい

承継のポイント

- 株式については相当程度の贈与する必要がある。従業員とオーナーという関係性からの脱却を図らないと経営革新はとてできない。
- 承継者が自ら、NO.2のポジションを外部から調達してくる。特に財務会計部分や経営数値で話せる人間が必要。

（つづく）

『相模の国から ～大魔神のたび～ 』 小田原の家の庭改造物語 '22.11.22  
茨城県境町 参与 溝口 久

今年4月号のアスリックニュースに小田原へ移住したことについて書いた。引っ越したのが今年のクリスマスイブの日だったから間もなく一年間になる。浜松に家族を残し、富士山の麓の小山町そして隣の神奈川県南足柄市を経てこれまた隣の小田原市へ、8年に渡るいわゆる単身赴任にはなるが、今や浜松にある家二軒分(戸建てとマンション)より広くなりどちらが本宅かの状況にある。

これまでの3軒はいずれも住まなくなって暫く経つ戸建住宅で貸家用ではなく現況のまま借りたから自ら手を入れてきた。ここ小田原の家もハウスクリーニング、不要物の処分、トイレ不具合の修理、建具の調整、障子、網戸及び照明の笠紙の張替をした。

家の中はこれでよし、次は庭だ。敷地面積800㎡のこの家の庭は漆喰の塀を背景に五重の灯籠、大きな石組からは水が落ち水路に流れていく。庭に山水の世界を表現している。かなり力量のある庭師の手によるものであることがわかる。

家中からみる庭の後ろの景はいいが手前は芝が荒れ草地になっていて、庭樹は自由奔放伸び放題になっていた。特に人を呼びしつらえの家だから何としても庭に手を入れなくてはと思った。

小田原は初めて住むところだから造園業者に知合いはいない。庭園を造ることができる業者を二社、知人から紹介していただき、大まかな構想と予算を示し提案を求めることにした。その直後に箱根で旅館を経営している窪澤さんから「若手でセンス良く熱意をもって仕事をする森本君っていうのがいるから、彼に頼んで欲しい。僕は彼を庭の世界で有名にしたいので、溝口さんの処も本で紹介されるようなレベルのものを」と言われ、それは面白そうだと、先に声掛けした二社には断りを入れて森本庭苑舎に頼むことにした。

そもそも「借りている住宅の庭にかなりのお金を投じることをするのか？」と人には言われたが、「ここに住んでいる内は自分のものだから、人を迎えるに相應しい処にしたい。」と答えていた。

浜松の自宅の庭の改造をかつてしたことがある。腕利きの庭師に全て任せた。その時に教わったことがあった。「庭は領域を区切ってデザインしていく。目線近くは造り込むけど、その先は四ツ目垣で区切り中木を植えて背景を造る。」そこで、小田原でも広い庭を区切って考えた。

玄関とリビングから見える範囲を茶庭として竹垣で囲う、それはすぐに決めた。次は和室縁側前に広がる荒れた芝をどうするか。地表200mm程掘り取りして芝を新たに張るか、他の地被類を植えるか、はたまた京の寺庭のように白砂利を敷き詰めて風紋を描くか、これぐらいが庭師からの提案だった。

うーん、いずれもパツとしない、人がそれを見て感動するか、そして自分が手入れできるか、決まらないまま茶庭の工事に着手した。

いっそ石のテラスを造って見たらどうか、高級感もあるし。市松模様にしたら面白い、縁側に対し45度振ろう。若手庭師森本君は伝統的な庭づくりの中に前衛

的な試みをするのが好きだ。現にでき上った茶庭の笥(かけひ)は竹ではなく銅管だ。ここぞという時には銅管をピカピカに磨いて際立たせ、夜にはそこに光を当てる。そんな彼だから賛同してくれた。

ここで森本君の紹介をしよう。1989年奈良県に生まれ、高校生の時に日本の庭園美に心打たれ、卒業後に京都の老舗造園会社に就職。神社仏閣、京町家の庭づくりをはじめ名勝文化財庭園の修復工事、維持管理を学ぶ。23歳で茶の湯の世界に触れ、茶道家出入りの金鋼造園事務所に入門。茶庭師である金鋼重治氏に師事し9年の修業を経て2017年に独立。主に箱根の旅館、別荘の庭を手掛けている。

その彼に提案した石テラスのある石庭に「それいいですね、やりましょう」から始まった。

「テラス周りの前半分を砂利敷きとして後ろは玉竜を植え付けましょう。」(森本)「うーん、テラスの周囲600mm幅に玉竜を植え、前半分には白系、後ろを青系の砂利にしよう。」(私)「その心は？」と尋ねられ「石から石への連続はうとうしいから玉竜で縁を切ろう。砂利の使い分けは、ここは海が近い、だから白砂青松。まいったかぁ」で決定。

市松模様の石張りテラスは石の大きさが450×900なので諦め、その代わり中心に先に延びる形で茶系の石として変化を付けた。

隣家を隔て庭の背景となる塀のデザインは板との間に竹を挟むものを、あえて隙間20mmを開けることで隣との遮断感を抑え、軽快な感じとした。

駐車スペースと庭を区切るために新たに設けた四ツ目垣の竹のピッチも、玄関に近づくにつれ細かくし格を上げていくことにした。

森本君はこれまで経験したことのない私からの注文に見事に応えてくれた。そこで10月29、30日の2回に分け庭お披露目・新そば会を計40名ほど集めて開いた。朝から茶庭、石庭の水打ち、さらには門扉前の道路に半円形の水打ち跡。「いずれも茶会を開く前にしていたこと」と彼は言った。集まった客人からは称賛の声をいただいたことは言うまでもない。

来年は門扉から玄関までの前庭の改造に入る。完成の暁には普段閉じている門扉を全開にして道行く人に披露したい。さらには庭まで入ってきてお茶を振舞いたい。それが西海子(さいかち)通りという武家屋敷街跡に住む者としてしてみたいことだ。

